市民の目線で市民が発信する
地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com/

SHIMIN PRESS

市民プレス：第22号

発行人　特定非営利活動法人
「市民フォーラム」
編集人　原　昭二
制作・印刷　デジタル工房
FAX　048（476）9111
〒353-0004
埼玉県志木市本町5-18-24

シリーズ「平林寺の四季」

-玄関と亀石-　写真：藤井 教文氏

前市長不出馬により延期されていた「朝霞市の基地跡地シンポジウム」続報

（本紙19号でその詳細を報道しましたので、ご参照ください）

新市長富岡勝則氏が公約されている「利用計画の策定」について、市民の関心を喚起するため、朝霞市主催で再開が決まった。

とき・8月18日（木）午後6時30分から9時
ところ・朝霞市コミニュティーセンターホール
基調講演・東洋大学国際地域学部長 藤井敏信氏

パネリストは市長のほか、既に要望や提言があった団体から2名、都市計画の視点や街の活性化を望む市民2名を予定。

シンポジウムのコーディネーターは前記の藤井敏信氏で、参加者は朝霞市に在住在勤する人200名、先着順に入場。

基地跡地利用の基本構想は平成18年12月、基本計画は19年12月を目途として作業に当たるもので、基地跡地写真展を本年7月19日～31日、朝霞市産業文化センターで同8月12日～18日、朝霞市コミニュティーセンターのそれぞれギャラリーで、また市民懇談会を本年10月から開催する。

問い合わせ・朝霞市企画財政部企画課企画調整係
☎・048（463）3089

朝霞市本町イイダ跡地の高層住宅開発

―計画のあらましは本紙21号を参照―

地上17階建て、高さ51㍍余りの高層住宅計画の発表は、商業地域に指定されていることは知っていても、30年近くそこに暮らしてきた住民にとっては、まさに驚愕のニュースであった。

住み慣れた低層住宅地の南側、しかも2㍍弱しかない道路に接して建築される高層住宅の計画は、消防活動、地震などの災害に対して大きな不安を与え、日照、風害の被害には恐れ戦く。

住民は「本町二丁目生活環境を守る会」を結成して建築反対運動に立ち上がった。

本会は6月23日に集会を開き、高さは30㍍、10階以下という具体的な要求を業者に申し入れるという方針を固めた。

朝霞市住宅マスタープラン（平成8年策定）では、住環境に配慮した計画的な立地要請がなされ、同年策定された第三次総合振興計画の中では、基本理念を暮らし優先・人間尊重のまちづくりとしている。「守る会」は商業地域の整備、景観形成計画の遅れを指摘して、業者に対して行政の適切な指導を求めている。

●石綿の飛散は大丈夫？

●建物裏手の路地で

市民は、わが身にも振りかかるという環境への認識を強く持つべきであろう。

激しい選挙戦で新志木市長誕生

久しぶりに二人の新人候補によって争われた志木市長選は、長沼　明氏が大差で制した。すでに公約として、前市長の施策の良きは継続するが、新規の政策実現を掲げている。

新鮮な抱負をもって市政をリードすることが期待される。

●志木市長選－街頭で

夏祭りをまちづくりに

いよいよ夏祭りのシーズンとなった。新座市の阿波踊りに加えて、朝霞市の彩夏祭は年々賑やかさを増してきている。

志木市のお神輿や花火はその歴史が古く、伝統的な夏祭りとしていまも人気が高い。

去る5月14、15日の神田祭り、同20～22日の浅草三社祭りは盛大に行われ、百万人もの人出で賑わった。

徳川家康が幕府を開いてから江戸総鎮守に相応しい壮麗な社殿が幕府によって造営された。この神田明神の祭礼は天下祭と呼ばれ、盛大に執り行われてきた。

何度かの震災で失われた社殿は、鉄骨鉄筋造り総漆朱塗りのものとなったが、平成7年からはじまった造替事業では建物すべてが塗り替えられ、その完成まで休止していた祭礼が本年、久しぶりに再開された。108ヶ町、200基ものお神輿が出て、殊更華やかに執り行われた。秋葉原の電気街では、大通りがお神輿で埋められた。

祭りの神輿は神社が所有する本社神輿と、氏子の町会が所有する町神輿の二通りがあって、本社神輿が町に出る『本社御渡り』と、町神輿が神社に出向く『宮入り』が最大の行事となっている。それぞれの地域の町神輿が町内をくまなく練り歩くことが、伝統的に町を活性化させてきた。

続いて5月20～22日には浅草三社祭りが盛大に執り行われた。

21日には百余りの町神輿が仲見世を通って浅草神社に宮入りし、各町内をくまなく巡行した。ハイライトは22日早朝6時、本社の大神輿、一ノ宮、二ノ宮、三ノ宮が宮出し、三基は氏子の各町内を廻り、日没に宮入りした。

ちなみに三社祭は毎年行われるが、神田祭りは隔年「陽のとし」に執り行われ、来年は「陰のとし」となり、休みになる。

秋葉原神田祭

新装成った
神田明神

浅草三社祭宮出し

新倉の「うけら庵」と江戸の狂歌師

歴史を紐解く　その21

郷土史家　安斎　達雄

ナンバーワンの狂歌師

幕末に江戸で活躍した大田南畝（一七四九～一八二三）という人物について、かつて歴史の授業で学習した記憶はないだろうか。狂歌師としては、いまだに日本でナンバーワンの知名度をほこっている人物だ。たとえば、こんな狂歌がある。

世の中は色と酒とが敵なり　どふぞ敵にめぐりあいたい

なかまが集まって、こうした戯れ歌をつくりあったサロンのリーダーが大田南畝である。

大田南畝像

かれは四方赤良とか蜀山人という別名ももっていた。

世は将軍の小姓から成り上がった田沼意次の時代。役人の間ではワイロが横行したようだが、比較的自由で気ままな雰囲気がみなぎっていた。こうした時代の空気の中で、江戸狂歌も天明時代（一七八一～一七八九年）に全盛期を迎える。

しかし天明六（一七八六）年、田沼意次が失脚し、かわって松平定信による寛政の改革が始まる。そんな時、有名なつぎのような狂歌が登場した。

世の中に蚊ほどうるさきものはなし　ぶんぶといふて夜もねられず

名門エリート定信は、綱紀粛正、文武の奨励をうたったが、それを「蚊のようにブンブ（文武）、ブンブとうるさいよ」と茶化した狂歌が登場したのである。

この狂歌は、南畝のものではないらしい。だけれども、江戸の民衆は南畝のものだと噂した。かれは必死に否定した。「是レ大田ノ戯歌にアラズ、偽作ナリ」と。

官吏にして文人

かれは牛込仲御徒町（現新宿区）に住んで、名を大田直次郎という。将軍が外出するとき徒歩でその警固にあたる「御徒」の任務にあたった。身分的には将軍直属の御家人であるが、実質は質素な生活をする下級役人なのである。

それからの南畝は、狂歌をつくって公表することはやめた。寛政の改革によって始められた、幕府の人材登用試験にも受験し、みごと合格した。時に四十六歳。若い青年たちにまじって、白髪まじりの自分が受験することに照れを感じた文が残っているが、制度ができたばかりだからやむを得まい。その後、勘定所の役人として大阪銅座や長崎奉行所に勤務し、七十五歳で亡くなるまで、忠実な官吏としてその職務をまっとうした。

蜀山人のこの変わり身の早さにたいして、研究者たちから批判が出された時期があった。しかし、武家社会の中で下級武士として生きる以上、失職とか投獄という最悪の状態を回避する行為を、単純に責める研究者は今はほとんどいない。

もっとも、狂歌をやめた南畝が、社交界から消えたわけではない。もともと漢詩をつくることは得意なことだ。のちに『半日閑話』（二十五巻）、『一話一言』（五十六巻および補遺）としてまとめられる随筆活動の量は「筆魔」とよびたいくらいだ。宴会にもよく招かれ、揮毫（書画）も求められた。文芸サロンの花形スターであることには変わりはない。

武蔵野の「うけら庵」

この文芸の大御所・大田南畝が、江戸から時たまやって来て、漢詩をよんだサロンが、新座郡新倉村（現和光市）にあった。その名を「うけら庵」という。

東上線の和光市駅の南口から駅前通りを川越街道方向に向かって歩く。左手に郵便局が見えてくるが、その郵便局を通り過ぎようとする所で、向かい側の細い道（うけら庵通り）を右に入る。その道はすぐに左に折れる道に出くわすので、そうしたら左折しよう。そこから数㍍も歩けば、右手に「史蹟　うけら庵跡」と書かれた和光市の案内板が見えてくる。

今でも残っているが、ここは代々新倉村の名主を務めてきた鈴木家の墓所であった。そこに墓守僧を置くために、鈴木家の六代目の当主直政（雅号は松蔭）が天明年間ごろに庵をきずいたのが、そもそもの始まりという。かつては広大な面積を占めていた鈴木家の敷地の一部であった。

「うけら」とは、現在「おけら」とよばれているキク科に属する多年草植物のことだ。丈は六十㌢ほどで、秋になると白や淡い紅色の清楚な花をさかせる。万葉の時代には武蔵野にたくさん咲いていた。現在はまれにしか見かけなくなったが、すでに江戸時代にも少なくなっていたようだ。「うけら庵」とは、この武蔵野の特色ある植物にちなんで付けられた名なのである。

「うけら庵」および「旧家」鈴木家のことは、江戸時代末期に江戸幕府が編集した『新編武蔵風土記稿』にも記されている。それによると、鈴木家の宅地の脇には大きな古松があり、他の松とは違っていたので、「新倉松」とよばれていたという。

大田南畝と竜隠松

大田南畝は新倉で、いったいどんな漢詩をよんだのだろうか。残念ながらわたしはそれを知らない。それではと、江戸東京博物館の図書室に入り込み、岩波書店発行の大田南畝全集（全20巻）を順繰りに閲覧し、三つの漢詩を探しだした。見当をつけて拾い読みしただけなので、ほかにもあるかもしれない。（ついでに平林寺を詠んだ歌もみつけました）

その中から一つだけあげておこう。天明八（一七八八）年八月、四十歳の時のもので、「新倉鈴木氏の園中の竜隠松に題す」との表題がある。

「版橋の西北村春を聴く　路は新倉に入って古農を訪なう　渭水千畝の竹を羨まず　唯だ冬嶺の一孤松を看る　天に横たわる偃蓋は鶴を棲ましむるかと疑ひ　地に屈する蟠根は竜を隠せるに似たり　甸服只今井税に帰す　高標何ぞ必ずしも秦の封を受けん」

この全集の漢詩には注釈がまったくついていないので、自己流に大意を書

うけらの花

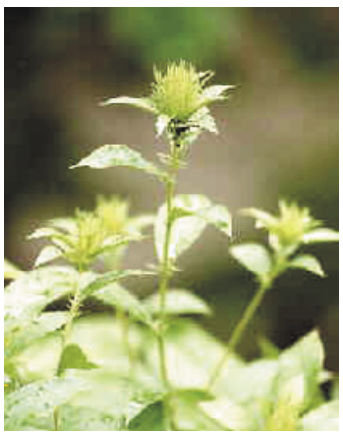
和名は「おけら」、きく科の野草

万葉集の歌によって、この野草は武蔵の国を象徴するものとなった。

恋しければ袖も振らむを武蔵野のうけらか花の色にいづ（出）なゆめ

戦前には、この地域一帯で見られた野草だった。かつては朝霞、志木、新座市にわたって残されていたはけの山では最近まで観察することができたが、いまその影は見られない（荒野久男埼玉大学名誉教授のお話し）。国分寺の万葉植物園で保存されている。この写真は水野暉久氏が7月に撮影されたもの http://www.club.prep.ne.jp/~t.mizuno/mny020.html

「おけら」は薬用植物として古くから使われ、根を洗って乾燥したものは「蒼朮」、皮を剥いて乾燥したものは「白朮」、芳香性健胃剤になり、正月の屠蘇散にも入っている。



おけらは昔から邪気を払うと信じられ、京都祇園の八坂神社では、大晦日の夜火をたいておくらをくべる行事が行なわれている。この火を火縄に移して持って帰り、元日のお雑煮をたく種火に用いると、一年間を息災に過ごすことができると信じられ、むかしから「おけら参り」として親しまれてきた。

「うけら庵」

和光郵便局の前から向かい側に渡ると、「うけら庵通り」の標識❶が見える。塀に沿って二、三十㍍歩き左折するとすぐ、「うけら庵❷」に着くが、この辺り一帯はもとは旧名主だった鈴木家の邸内に含まれていて、「うけら庵」の一隅は代々の墓所である❸。本宅はもとは和光郵便局の場所にあったが、向かい側に移り、その門構えは移築された。

❶

❷

❸

くと、こんなことになろうか。（かん違いがありましたら、お教え下さい）

「板橋宿の西北で鐘の音をききながら、新倉に向かう道に入って古い農家を訪れた。中川べりに、うっそうと生えている竹には目をくれず、ただ冬の山の頂にある一本だけの松の木をじっとみる。

天に蓋をするように横に伸びている松の姿は鶴をすまわせているように見え、地をはっている曲がりくねった根は竜を隠しているように見える。町はずれにあって、いま納めるべきものはきちっとすませた。高望みして、どうして為政者の金などあてにしようか」

名主である鈴木家に仮託して、みずからの気概を歌っているようである。「竜隠松」は「新倉松」の別名のようだ。

鹿都部真顔と広き旅心

大田南畝の弟子筋にあたる狂歌師の鹿都部真顔（一七五三～一八二九）も、「うけら庵」を訪れた江戸文化人の一人だ。その著『芦萩集』には「うけら庵」を訪れたときのことを、このように記している。

「文化二年真顔五十二歳後の葉月の初め、木曽路にかかりて武蔵野のかたに入りて新座の松蔭がうけらの庵をたつねけるに、あるじ色に出て悦びつゝなごやかなる衾なとまうけて草枕ともおもはれさりければ

蚊やつらぬやとりをとりて寝心もかくべち広きむさしの、原」

「文化二（一八〇五）年、五十二歳を過ぎた陰暦八月の初め、中山道から武蔵野にはいり、松蔭の雅号をもつ鈴木家の主人の「うけら庵」をたずねると、主人は喜びの表情を顔に出し、なごやかに夜具などを用意してくれたので、旅の仮寝とも思えず句をよんだ。―蚊帳をつらなくともよい宿なので、広々とした武蔵野のように、旅寝の心もゆったりする。」

「うけら」の煙には蚊を追い払う効果があるとのことだから、これを蚊遣りのため焚いてくれたのだろう。

「うけら庵」その後

交流を重ねた文人たちは、ほかにもたくさんいたようだ。その後「うけら庵」は、明治・大正以降は、地元の人たちの集会場、公会堂として開放された。戦後まもない昭和二十三（一九四八）年には、埼玉県の史蹟にも指定された。しかし、古い庵の荒廃がすすみ、特に萱屋根に痛みがはげしく、また、屋根葺き用の萱が入手できない状態がつづいたため、昭和二十九（一九五四）年ごろ、やむなく取り壊すこととなった。その後、地域文化振興の立場から、現鈴木家当主の決断により、平成元（一九八九）年十一月、新しい「うけら庵」が再建された。

これを、新たな地域交流、文化振興の場としてどのように生かすことが出きるのか。かつての江戸の文人、郷土の文人たちが、談笑しながら見守っているかもしれない。

アルバム・1

東武東上線が開通してから91年

江戸時代、この地域の人と物資の交流は、川越街道や新河岸川の舟運によって支えられてきた。しかし明治に入ってからは東京を中心とする鉄道の敷設によって、交通事情は一変した。

東上鉄道株式会社が設立され、大正3年（1914）5月1日に池袋から田面沢（現在の川越付近）間が開通してからは、鉄道が街道と水路の交通に取って替わっていった。

志木、膝折（現在の朝霞）駅が設置され、貨物と旅客の輸送は鉄道輸送が中心となり、大正5年には坂戸町まで延伸された。大正9年経営面の合理化などのため、東武鉄道と合併して東武鉄道東上線となり、同12年には東武東上線として、今に至っている。

①

③

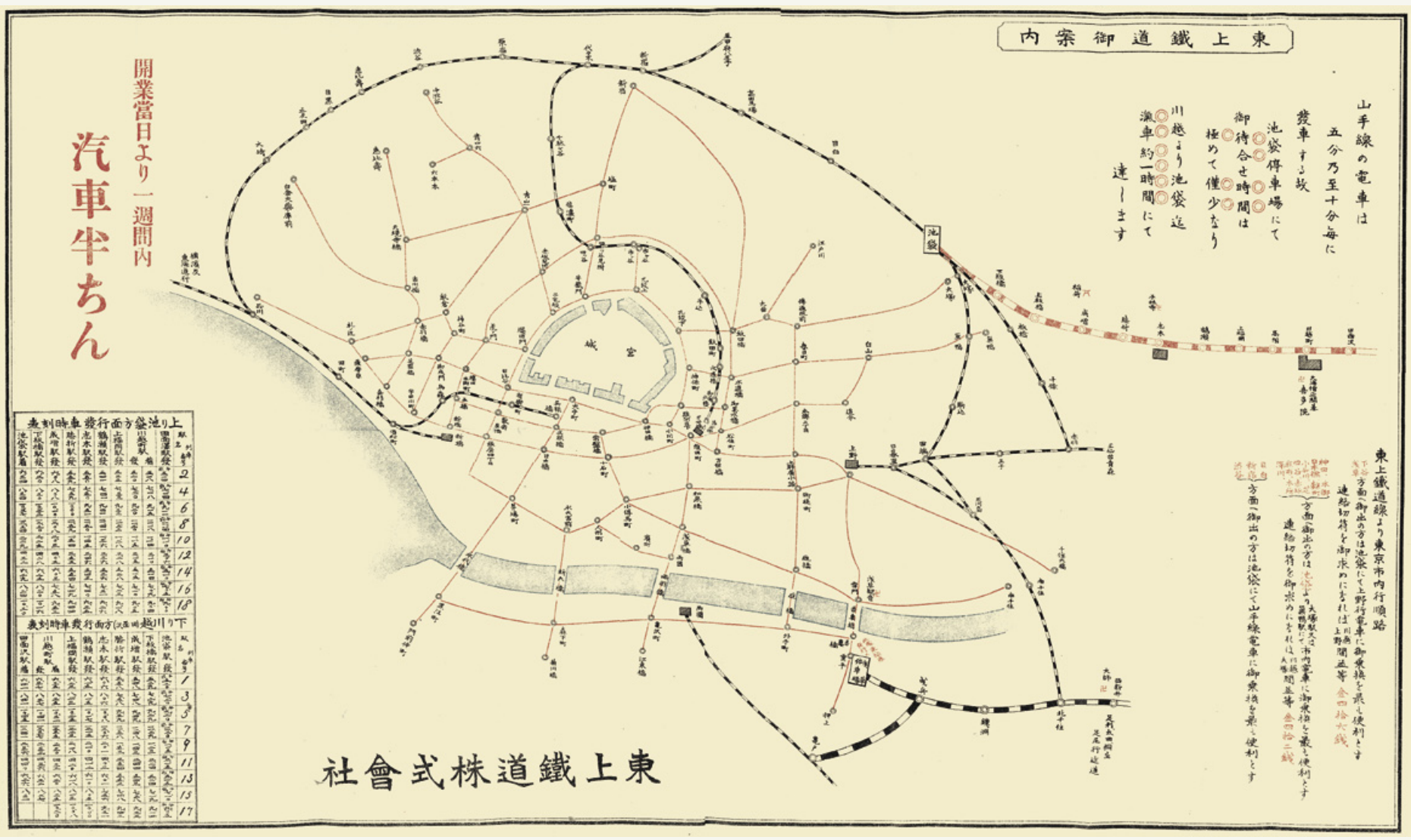
②

④

⑤

写真①は志木駅停車建設中の風景、②は開業間近の志木駅、③は志木駅開通風景（大正3年）、④は志木駅貨物ホームで貨車積みを待つ米俵の山、⑤は、ときは下って昭和28年頃の志木駅ホーム（志木市市制施行20周年記念「ふるさと写真集」より）。

東上鉄道開業記念、運賃半額割引のちらしが90年を経て蘇った（志木市 石原弥五郎氏蔵）。



くらしのヒント

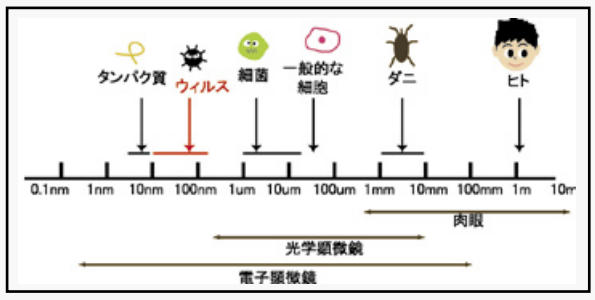
ウイルスに異変が…

その2・はげしい増殖

人に感染するウイルスが突然出現して社会を混乱に陥れる恐れがあるので、世界保険機関（WHO）は、徹底的な監視が必要であると警告している。

前回お話ししたように、ウイルスは実は古くから地球上に存在していた（30億年前から）。細菌とウイルスはともに感染症に関わるため混同されることがある。しかし。細菌とウイルスには根本的な違いがある。

ウイルスは光学顕微鏡で見える細菌よりずっと小さいので、その姿を見るために電子顕微鏡が必要である。



細菌は原始的な細胞で、動物や植物の普通の細胞と同じように、分裂によって増殖するのに対して、ウイルスは、子孫を残すための核酸をもっているが、代謝機構やエネルギー機構はもっていない。これらの生き物に寄生し、その機構を借りて子孫を増やす。

ここで注目したいことは、寄生した細胞の中で起こるものすごい増殖の有様である。

ウイルスの増殖の様子を以下に見てみよう。

まず細胞の膜に付着し、そこから侵入するのだが、付着するメカニズムとして考えられるのは、ちょうど鍵と鍵穴の関係である。ウイルスの表面には細胞に結合する鍵の部分があって、細胞膜にあるこの鍵に合った鍵穴の部位（受容体）からウイルスは入り込む。もし鍵が鍵穴に合わなければ感染は起こらない。そのため、あるウイルスが感染できる生物の種類は限られるわけである。

いよいよ細胞に侵入したウイルスは、細胞の中で外側の殻を脱ぎ、ウイルス粒子の中の核酸とたんぱく質が露出する。この核酸を鋳型としてたくさんの核酸のコピーがつくられ、一方核酸の遺伝情報によってウイルスたんぱく質が合成される。ついで新しくつくられた核酸とウイルスたんぱく質が組み立てられて子供のウイルスができ、細胞の外に放出される。そしてさらにまわりの細胞に感染してゆく。

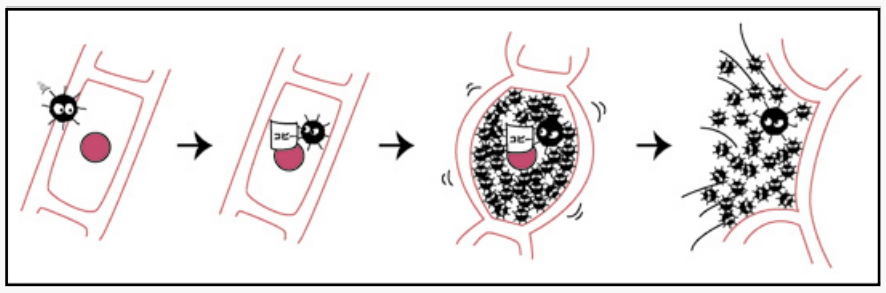
細胞に侵入したウイルスが殻を脱ぎ捨て、子ウイルスが生まれるまでの間は見えなくなるので、この時期を暗黒期と呼んでいるが、子ウイルスは増えてくると、細胞を破って外に飛び出し、はげしく周囲の細胞に襲いかかる。

一個のウイルスから生まれてくる子ウイルスは、多いものでは十万個にもなり、要する時間は6時間ないし40時間くらい、さらに身体の中で増殖する数はまさに天文学的である。

引き続きこの講座をつづけて行きます。次回もよろしく。

参考書　山内一也著「ウイルス究極の寄生生命体」NHK人間講座、2005、2～3月。

挿絵　理化学研究所、分子ウイルス学ユニットの一般公開資料を参考にして作成。



特定非営利活動法人
NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

＊　＊　＊

◇　読者の「オピニオン（意見／考え）」を募集します。

☎090（3048）5502

編集部　原宛にどうぞ

アルバム・2

東武東上線駅舎の今昔

写真⑥は昭和7年当時の膝折駅（埼玉県行政文書 昭和2541）埼玉県立文書館蔵。

ホームの一角に大きな変電所があった。

写真⑦は昭和29年の大和町駅（現・和光市駅）。最初は新倉、にいくら、次いで大和町、そして昭和45年に現在の駅名になった。戦時中には、朝霞、和光両市にまたがる広大な「広沢」に陸軍予科士官学校が建設され、その正門に向かうための玄関口として、駅舎には貴賓室を備え、他の駅と比べるとひと際端麗な建物であった。

写真⑧は昭和54年の和光市駅ホーム、1面2線だったホームは有楽町線乗り入れで、その後2面4線となっている。

写真⑨は昭和44年の志木駅南口、周囲は雑木林に囲まれ、雨が降るとぬかるみができた。

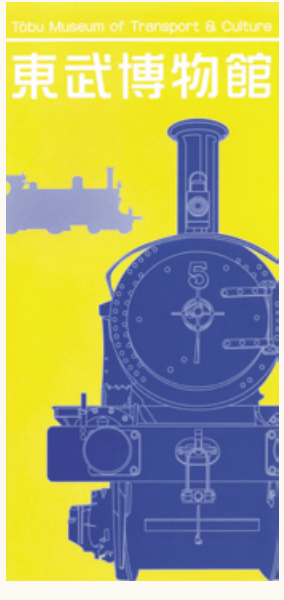
以上の写真⑦、⑧、⑨は東武博物館提供

⑥

⑦

⑧

⑨



東武博物館で特別展「東武電車のヘッドマーク」

8月31日まで

開館時間
10時～午後4時30分

休館日
毎週月曜日
（但し　7月18日開館、19日休館）

ところ
東武伊勢崎線「東向島駅」下車、駅のとなり

入館料
二百円（小児は百円）

浅草から隅田川を渡って間もなく、東向島駅につながって設けられたこの博物館には、体験的なミュージアムで、かつての蒸気機関車から電気機関車から、木造電車、バスにいたるまで、東武鉄道が誇る多くの乗り物が展示されているばかりか、シミュレーションや動くパノラマも見られ、乗り物の楽しさを味わうことができる。その他に、SL運転ショーやパノラマショーも見られる。

特別展では、日光線の特急「けごん」から東上線の「フライング東上号」、団体専用の「ブルーバード号」、有楽町線との直通運転開始の「ヘッドマーク」などが展示されている。

時間があれば、ここから歩いて数分の「百花園」にも立寄ってみたい。

⑩

写真⑩　ヘッドマーク
有楽町線乗り入れ